情報工学科　　256129　　杉浦 圭

私は、ソクラテスの「無知の知」について記述します。

まず、「無知の知」はソクラテスが最も賢いという趣旨の神託を伝え聞いたソクラテスにより生まれたのである。ソクラテスは自分より賢い人がいることを示そうとして、自分の知らない善や美の本当の在り方を教えてもらおうとしたが、ソクラテスの問答によって、知識人たちはそれを知らないことが暴露されてしまった。知識人たちは裁判を起こしたが、ソクラテスは、彼らは、知らないのにもかかわらず知っていると思い込んでいるのに対して、私は自分の無知を自覚している分だけ私の方が賢い。神託はこの意味でソクラテスが賢いと言っており、こうして無知の知という思想が生まれたのである。ソクラテスはのちに神<アポロン>が真に知恵あるものであって、神託において神はこのことを、すなわち、人間の知恵というものは全く価値のないものだということを言おうとしている。さらに、一例としてソクラテスの名前が使われたのであって、神<アポロン>は次のようにのべているかのように思われたのである。すなわち｢人間たちよ、お前たちのうちではこの者が、つまり、ソクラテスのように自分は知恵についてはまったく価値のないものだと自覚している者がもっとも知恵ある者だ｣、とそう弁明した。ソクラテスは｢正義とは何か?｣と問い、｢正義とは借りたものを正当に返すことである｣と答えられ、｢ならば借りた恨みを返すことも正義か?｣と問うと、他の人は答えられない。それまで｢正義｣と思い込んでいたことは<正義の事例>に過ぎず、<正義>そのものではない。人間の｢善さ｣｢卓越性｣こそ｢知｣の対象である。すなわちソクラテスは、知るべきは｢みずからが善く生きる｣ことであると解釈した。<正義の事例>のように、一事例の過剰な一般化による思い込みを<ドクサ-時や場所、人によって異なる知->と言い、対立に<エピステーメー-普遍的に妥当する知->がある。｢無知の知｣では、｢ドクサ」は知では無いことを｢知｣っている。すなわち、<ドクサ>と<エピステーメー>の区別を｢知｣っている。｢ドクサ｣と｢エピステーメー｣の区別は、｢～のもの｣と言った偶然的･現実的存在、生成変化｢～であったりなかったりする｣が<ドクサ>であり、｢～そのもの｣と言った必然的･本質的存在、永遠不変｢常に～である｣のが<エピステーメー>であると区別できる。存在/非存在の区別は、現実存在＝｢非存在｣であり、本質存在＝｢存在｣である。現実の世界の中には｢存在｣は見出されない。すなわち、永遠不変の｢存在｣の世界としての<イデア界>の作成だろうか。ソクラテスは、｢無知の知｣は、一つのことについて無知であることを知っていることは、その存在を知らない人よりは優れていると思われるが、必ずしも相手より優れているとは限らないと考えた。

私は、このソクラテスの｢無知の知｣とメノンの｢知的探究｣･｢想起説｣。メノンのそのものの可能性について知っていることも知らないことも探求できない”探究のパラドクス”を説いたメノン。この二つの思想は似ているようで似ていないようにも思える。｢知的探究｣は｢自分が何を探究しようとしているか分からないから、知らないことを探究することはできない｣。よって、探究開始不可能性･探究継続不可能性･探究終了不可能性があげられるために｢知的探究｣は不可能である。さらに｢想起説｣では｢何かを知っていたが忘れている｣という｢知的探究｣に想起していると説いている。人間の中に｢感覚｣に由来しない｢知｣があらため内在するからであり、忘れたのは｢魂は不死であり恒常的存在であるから、ソーマはセーマである｣と説いている。このソクラテスとメノンの思想はすべて合わせて｢無知の知｣として成り立つのではないか、と考える。探究開始不可能性より、探究し始めることができない事を知っている。すなわち｢無知の知｣がここにもでている。｢想起説｣の｢知っていたが忘れている｣という知的探究に想起していると考えると、無知であることを知らない人たちも｢知らないのに知っている｣と忘れているのに言ってしまったのではないかと考える。ソクラテスの｢エピステーメーの追求｣の<知行合一>と<知徳合一>の<知徳合一>では、生きるということは｢知的活動｣そのものである、といった意見を聞き知識を身につける人としての良さについては、とても共感する部分であって、人は子をその身に宿し、その身に宿した子はお腹の中ですでに｢知的活動｣を続けていて、さらに乳幼児期から喋るようになるまでも学習している。大人になっても仕事に対する｢知的活動｣は多い。すなわち、生きるということは｢知的活動｣そのものである、と説いたソクラテスは人そのものを客観的に捉え、普遍的に妥当する知など、そのものの本質の把握、つまりエピステーメーを追求するということは｢人の｢善さ｣と｢卓越性｣こそ｢知｣の対象｣として、人の本質を捉えているのではないかと考えた。